

日本人の文化と精神の研究

第1回 震災で見せた日本人の規律性と「社会の目」

☆東日本大震災

今回から日本人の文化と精神の研究の連載を始めます。私は振学出版研究員の宇田川敬介です。よろしくお願いいたします。

第一回目ということで、何からはじめようかと思ったのですが、世界の皆さんにもっとも歓心を持っていただける内容として「震災」に関する日本人の対応と書くことを見ようと思います。

今年の3月11日で、あの東日本大震災から2年の月日が経過します。東日本大震災は、未曾有の被害を出し、また、それに伴って発生した大津波によって多くの人の命が犠牲になりました。改めて、犠牲になられた方のご冥福をお祈りするとともに、被害に遭われたかたがたにお見舞い申し上げます。

さて、この津波の後、世界各国のマスコミは日本人の秩序に関して賞賛のコメントを多く発表しました。多くの外国人記者と私が話をしたところ、多くの外国人記者は、たとえばハイチまたは中国の四川省、トルコなどの大地震の取材または北スマトラの大津波の被災地の取材を経験している人が少なくありません。その人々は、「日本の被災地の取材でも、略奪などの被害に遭うと思って護身用の道具を持ってきた」というのです。福島第一原子力発電所の放射能漏洩事故が発生したために、当時放射能測定器が多く売れたのはニュースになりましたが、同時に外国人によって護身用の「警棒」または「スタンガン」なども多く売れたのです。しかし、多くの外国人記者たちは「無駄な投資でした」というのです。

日本人は、今回の震災に乗じて暴動を起こしたり、略奪をしたりと言うことが極端に少なかったといえます。炊き出しや食料品の配給のときも、きちんと列を作り、割り込む人もいない、配給の自分の順番をおとなしく待っている。自分の前で配給の食糧がなくなっても、多少の文句は言っても暴動につながることはないばかりか、その前でもらった人が配給を受けた食品を分けて与えると言う姿は、外国人の記者から見て、すばらしいものに見えたそうです。

西暦869年、平安時代前期の清和天皇の治世で、ほぼ同じ場所で大震災と津波が発生しました。今に伝わる貞観大地震です。貞観大地震は、広く東日本大震災と同じ規模で被害をもたらしたと推定されますが、当時の記録「日本三代実録」の記録は、現在の宮城県多賀城市近辺の記録しか残されていません。当時は東北はまだ「蝦夷」が支配し、大和朝廷の支配が及んでいない地域であったために、大和朝廷は陸奥国に多賀城を築き、その征討を行っているさなかでの地震であったのです。

清和天皇は、この震災においてすぐに「詔」を發布します。その内容は、「予に深い責がある（責深在予）」「民夷を問わず慰撫させる（不論民夷。勤自臨撫。）」「被害の甚だしい者は、租調税を減免する。寡婦や孤児、自立できないものに手厚い支援をする。（其被害太甚者。勿輸租調。鰥寡孤。窮不能自立者。在所斟酌。）」（カッコ内原文より抜粋）と言う内容であり、伊勢神宮に支社を使わせて奉幣し、神前に次の通り告文を捧げたのです。

震災などの天災に遭遇したときの、日本人の心がこの「詔」の中に凝縮されているのではないのでしょうか。今回はその解説と、そして東日本大震災における日本人の精神を考えてみましょう。

★ 日本人と地震

地震の被害に対する日本人の考え方より前に、まず、日本人は地震をどのように考えているのでしょうか。古来、日本では「地中深くに大ナマズが存在し、その大ナマズが暴れることにより大地震が起きる」という俗説が信じられていました。江戸時代には安政の大地震を期に鯰絵と呼ばれる錦絵が流行するなど、日本人にとって地震とナマズが身近な関係にあったことが伺えます。また、鹿島神宮にはこの大ナマズを抑えるという要石があり、地震の守り神として信仰されています。地震避けの祝歌に、万葉集の歌を使った「ゆるぐともよもや抜けじの要石鹿島の神のあらむ限りは」（要石は動きはしても、まさか抜ける事はないだろう、武甕槌神がいる限りは）というものもあるほどです。

一方、日本で広く信仰されている仏教では、「三災七難」という言葉があります。為政者がまともな政治をしなければ、自然災害や疫病などの不幸が訪れて、その国に戒めを与えると云うものです。地震はその「三災」の中のひとつとされ、傲慢と不平が原因で起こされる自然災害であり、自然災害が起きるのを防ぐには戒・定・慧を勤修し、三毒を息滅することが必要だと教えられています。

日本は「地震国」と言われるほど地震が多いのです。日本人は地震を日常の天候と同じような感覚で地震を捕らえていたのではないのでしょうか。仏教のように「神々のお怒り」と言うものではなく、どちらかと言うと「ナマズ」と言う、日常にいる生物が暴れることで発生すると考えていたのです。まさに人間の寝返りのような感じでナマズが暴れることもありうるということになります。もちろん、仏教の考え方も入ってきているので、神々のお怒りで地震がおきると言う考え方もあったと思いますが、やはり民間伝承で「ナマズが暴れると地震が起きる」という話が今も伝わるのは、日本人の性質の中にそのような感覚が存在するからであると思われまます。

日本人は、多くが日本神道という日本固有の宗教観を持っています。神道について詳しく解説するのは次回以降に回しますが、基本的に日本人は森羅万象すべての現象や物品に「神が宿っている」と考えます。食べ物に関しては「食べられる」と言うことによって食べ物に宿るが役割終え、その生き物は次の生命の栄養となることで魂を浄化することにな

るのです。そのために「食べ物を残す」と言うことは、食べ物そのものを粗末にするだけでなく、食べ物となった食材の命や魂を粗末にしたということになり、同時にそこに宿る神々を粗末に扱ったということになるのです。

自然現象も同じで、さまざまな神々が自然現象に関係してきます。平安時代に編纂された「今昔物語集」の中には「雷に蹴り殺される」と記載されている記述があります。これは雷は「神が龍に乗って田畑に下りてくる」ということを意味しており、雷に当たるのは「神の乗った龍の足に蹴られた」という表現をしていたのです。「蹴り殺された」というだけで今昔物語が成立していたのは、その認識が広く行き渡っていたということではないかと考えられるのです。このように自然現象の多くを神々の行動に関連するものとして、認識し、その自然災害で犠牲になった方々は、「神々に選ばれた」と言うような発想をするようになったのです。

現在も、日本人の潜在意識の中には、「森羅万象に神が宿る」という発想があります。日本人は「宗教がない」と言いながらも、正月には初詣でお参りをし、何かあればお守りを身に着けます。不謹慎な言い方かもしれませんが、日本人の多くは「キリスト教」の神も、「イスラム教の神」も「仏教の神」もすべて「森羅万象の神々のひとつ」と言うような感覚を持っています。それだけに、「初詣に行きながら、クリスマスを楽しみ、葬式は仏教で行う」というようなことが「平然と」行われるのです。

さて、東日本大震災についても、さすがに現在の科学の世の中で「ナマズが暴れた」と本気で信じる人は少ないのかもしれませんが。しかし、地震が発生したという感覚やこの時期このときに発生したということ、また、犠牲になられた方と生き残った方の差など、科学だけでは説明がつかない部分に関しては、やはり、「身近にいる神々」の何らかの力が働いたということ、そして犠牲になられた方も「神に近い存在になって現在も見守っている」という感覚は、日本人特有の感覚なのかもしれません。

★ 貞観地震での詔の効果

地震がこのように「身近な存在」であるということから、犠牲者が出たことに関しては悲しいが、しかし、そのことをもって誰かを恨んだり、あるいは生きているものだけで略奪を働くということを考えないのが日本人なのです。そして、その日本人本来の考え方を呼び起こすきっかけとなったのが、清和天皇の詔の中に入っているのではないのでしょうか。

では、少し「詔」の重要な部分を見ながら、それを聞いた当時の日本人の心を想像してみましよう。

まず、大きな災害に見舞われたとき、まず「自責の念」を持つものです。これは、日本人に限ったことではありません。自分の身近な人が亡くなった場合や、不幸に見舞われた場合は、まず、自分の行動から見直し、何かしてあげられることはなかったか、自分の行動に非がなかったかを省みるのです。日本人は、その性質が特に強くあります。そのよう

なときに、その「自責の念」から開放してくれる人がいると、人間はかなり楽になります。日本人の場合は、そのような苦しいときに宗教に入信する人が多いように、人間は弱いものですから、どうしても誰かに頼ったり、すがったりしたくなってしまうのです。

清和天皇の「予に深い責がある（責深在予）」と言うのは、まさに被災者のその心理状態に対して深く心に残るものではなかったのでしょうか。中国の四川省大震災のときも、温家宝首相はすぐに現地に視察に訪れました。これに対して、東日本大震災のとき、菅直人首相はヘリコプターで上空からの視察だけで、被災者と直接語り掛けなかったことは、後になって非常に強い不満として多くの報道がされたことは記憶に新しいのではないのでしょうか。

そして、清和天皇はすぐに被災地に対して救済の手を差し伸べます。「被害の甚だしい者は、租調税を減免する。寡婦や孤児、自立できないものに手厚い支援をする。（其被害太甚者。勿輸租調。鰥寡孤。窮不能自立者。在所斟量。）」と言うように、税の免除、手厚い支援を行い、復興の手助けをするということになります。税の減免や生活自立のための支援は、まさに千年前の同様の被害に対しても日本の当時の為政者は大きな被災地に対して行ってきたものです。日本人の規律性やあるいは、日本人の秩序に関する意識ということもありますが、同時に、当時からさまざまな自然災害を経験している日本にとって、その被災地に対して支援を行うというのは、ごく自然なことであり、何もすぐに略奪しなくても、また暴動を働かなくても、被災地において多くの人が助けてくれるという感覚は日本人の中に現在も存在するのではないのでしょうか。

日本の言葉の中に「情けは他人のためならず、回りまわって自分のために」という言葉があります。日本人は、さまざまなことに対して「縁」という言葉を使い、人と人のつながりを感じるようにできています。縁があるから、これだけ多くの人の中においてあなたと私が知り合うことができたということになるのです。そして「縁」が多いほど、その人はさまざまなことを経験し、ありがたいと感じるようになるのです。先に紹介した「情けは他人のためならず」と言うのは、まさに、他人に情けをかけるのは、その人のためにならないなどと言う意味ではありません。「情け」要するに、「さまざまな施しをする、または手助けをするのは、将来または来世以降、自分が困ったときに、縁がある人の機会で、回りまわって自分が助けられることがあるということ」であり、また同時に「その縁があるからそのような機会に恵まれたのであり、その縁を大切にし、人との縁が重要であると言うことを認識し、同時に、他人との縁が、自分を助けてくれることも非常に多くあります」という教えでもあります。

東日本大震災のときは、この「縁」という言葉ではなく「絆」という単語を使って人とのつながりの重要性をアピールし、日本に住む多くの人々が被災地のために立ち上がったのは記憶に新しいところではないのでしょうか。

その「縁」を重要視するということから、清和天皇は「民夷を問わず慰撫させる（不論民夷。勤自臨撫。）」という事を言っております。「縁が大切」と言うことに関していえば「袖

触れ合うも他生の縁」と言う言葉もあります。本当にこれだけの人がいるのです。特に外国の人なども多くいるのですから、その中で一瞬袖が触れ合うだけでも「来世・または前世など時間を越えて生きているときの縁」があるのかも入れないということもいわれ、縁を大切にすることを非常に重要視するようにしているのです。通行の最中に袖が触れ合っただけでもこのような縁があると言う感覚があるのです。ましてや敵味方で戦う相手などは、時間を越えて深い因縁があるに違いありません。その内容はまさに、自然災害の前では日本人も何もなく、「人の命」と言うものに対して慰撫するというのは、ある意味で当然であり、敵だから何もしないなど差別的な感覚はなく接するということになるのです。

この清和天皇の詔の中には、まさに日本人の感覚が非常に良く現れていると考えられるのではないのでしょうか。そして、この詔が出たことによって、多賀城付近の被災地では戦争は一時休戦し、そして、施しを行うことによって、戦争によらず多くの人々が信服したと言います。また、敵味方関係なく、差別なく慰撫するという考え方は、今回の東日本大震災の中でも、工場で働いている中国人を助けて犠牲になった企業の人の美談が伝わり、中国国内では非常に強く印象に残ったと言います。まさに、日本人はこのような感覚を持って他人と接していると言う最も良い例、そして、その日本人の性質が貞観という千年も前から日本人の性質として残っていると言うことが言えるのではないのでしょうか。

★ 日本人の地域社会と氏神様

日本人は、地震・大火災・台風・洪水・そして戦禍とさまざまな災禍に見舞われ、そして復興を遂げている。そのさまざまな被災の経験から立ち直った歴史を持っていることが、日本人の強みのひとつであり、歴史と経験を持った民族とその伝承の力はかなり大きなものとして、今回の東日本大震災の中においても活かされてきました。「釜石の奇跡」と言われた「てんでんこ」がもっとも有名になった伝承の力ではないのでしょうか。「津波が着たら『てんでんこ』」と言うのは三陸地方の言い伝えのひとつです。「てんでんこ」とは、ばらばらでも良いから一刻も早く高台に非難しろ、という意味であるという。このようなキャッチフレーズのような言い伝えでも、釜石の小学校では被害者を一人も出さずに大きな効果が出たのは、日本だけでなく多くの「減災」の考え方のひとつの模範例として語られています。

このような「地域による口承伝承」は、何も政府によっていちいち指示されたわけでもありませんし、また、学校の教育課程に記載されているわけでもありません。大昔から、日本人は家族の中で、または地域の中で昔の経験をした人から語り継がれてきたもの、それを次の世代が語り継いで伝えてきた、地域独特の内容なのです。この「口承伝承」は、まさに地域社会が形成され、そして、その伝承がしっかりと根付いている地域において大きな力を発揮します。そこには政府や役所などとは関係のない「社会」が形成されているのです。

社会の形成は、当然に「口承伝承」だけのものではなく、当然に「地域における人のつながり」にも深く関係があることとなります。日常の生活における相談や、日々の助け合いなども、すべてこの「地域社会」において行われていましたし、また、ある程度の地方自治も地域社会の中においてできていたということがいえるのではないのでしょうか。現在も、日本の多くの街で「町内会」や「〇〇町〇丁目自治会」などがあり、地域に自治会館などが存在するのは、まさにその名残とも、あるいはそのような自治制度が今も生きていくということもいえるのではないのでしょうか。日本、いや日本に限ったことではありませんが、血縁を基にした集団以上に「地縁」を根底に据えたつながりがあったのです。

「遠くの親戚よりも近くの他人」と言うことわざがあります。まさに、その言葉は、何か困ったことがあるときに、助け合いを行うのは「遠くにいる血縁」よりも「近くにいる地域社会のメンバー」と言うことを言っています。遠くにいる親戚は、地域性やその土地の特性も理解していないし、また、その土地での生活に慣れていないわけでもないということになります。何か困ったときも、当然に地域性に基づいて解決し助け合いが日常的に行われるという前提で考えれば、遠くの血縁よりもその土地の習慣や風習になれた地域の人を頼ったほうが良いということになります。

逆に村の人の絆を立つと言う意味では「村八分」と言う言葉もあります。これは、同じ地域社会の中でルールを守らない人・禁忌を犯した人に対して、その人を「村のメンバーとは認めない」と言うことで、その制裁をするということです。「八分」とは、まさに「メンバーとしての関係の八割を行わない」ということであり、葬式の世話と火事の消火活動という、放置すると他の人間に迷惑のかかる場合以外の一切の交流を絶つことを意味している。これが、地域社会において「制裁」と言うことが通用するくらい、地域社会の成立は日本人にとって重要なことであったと言えるのです。

さてでは、これほど大事な「地域社会」は、どうやって形成されたのでしょうか。歴史的に見れば、弥生時代からできた稲作農耕において、血縁社会よりも土地で協力しなければならなかったため、その地域の農耕従事者が一緒になったということになっています。もちろんその側面もあるでしょう。しかし、それでは、都市部は昔でもあったわけですから「町会」のような地域社会は生まれにくいことになってしまいます。日本には、各地域に神社や祠があり、また「講」と言われる民間信仰の塚などが存在します。たとえば「富士講」などという、その町の中の小高いところに富士山の石を持ってきてお供えし、「富士講」として、霊山である富士山に参拝したのと同じ効果があるとしていました。当然に、その富士講を行うのはその地域の人を中心でした。

そのような「講」がなくても、現在でも「氏神様」はいて、その氏神様を祭るお祭りは、最も多いのは秋ですが年間のどこかで行われることとなります。日本人は、神々と常に近くにいると言う意識に問題は、地震に関する日本人の感覚からすでに申しあげている通りで、その神々と近くにいると言う意識は、何も非常事態や天災が発生したときだけでなく、日常のときからいつも神々とともにいると言う感覚があるのです。そして、その氏神様が

ひとつの単位になって、地域社会が形成されてゆくことになります。社務所や神社の境内などは、ある意味で地域の人々の憩いの場でもあり、また人が集まる場所、そして祭りの場所でもあれば会議の場所でもあったのです。まさに、ヨーロッパの都市の「噴水広場」のようなところであったと考えていただければイメージがわくのでしょうか。

そして、その氏神様をお祭りする「祭り」が、まさに村人が総出で行う一大行事であったのです。祭りはしきたりや過去の経験が必要であったために、自然と「長老」「ご隠居」と言われる人が、昔の経験やその地域の習慣、「しきたり」を伝え、そして、その内容を伝承してゆくのです。

神々と近くにいると言う感覚は、神々を祀りながら、自分たちも楽しむと言うように「氏神様と一緒にいる」ということになります。そこで、お祭りでは「御神輿」といわれる神様の乗り物を地域の人々が担ぎ、その地域の中を練り歩きます。まさに、氏神様が輿に乗って地域社会の人々と一緒に街を見るという感じでしょうか。神と人間と一緒にいる地域の良いこと、たとえば豊穡や大漁を喜ぶということになります。氏神様にも酒や食事を供えるのは、一緒に祝うと言うことが前提だからなのです。このようにして地域社会ができてゆく、居間もその伝統や慣習はさまざまなところで残されているのです。

★ 地域社会と氏神様と秩序

この地域社会、まさにこの氏神様を中心にした地域社会において、その町の習慣やその町の生活様式を中心にした習慣が、地域社会の中で根付いています。そして、その地域社会において「恥ずかしいこと」をすれば「社会そのものを壊す」行為になってしまうのです。

少し前までは「世間体」とか「社会の目」と言うものがありました。「世間体」も「社会の目」も似たような意味合いで、「社会的な視点からの自己のみなされ方」と言うような意味になります。しかし、実際に「社会」とは何なのかと言えば、まさに、ここで見てきた「地域社会」そして、その中心にいる「氏神様」と言う感覚になるのではないのでしょうか。それだけに、日本人の多くの方は、特に昔の人ほど、同じ価値観を持っており、同時に同じ感覚の倫理観や社会性をもっていることになるのです。

他人が困っているときに略奪をしない。または、困ったときはお互い様、などのさまざまな日本人の間にある言葉は、まさに、その社会性の中における倫理観が語られています。そして、地域性という意味では、三陸の「てんでんこ」のような内容が出てくることになるのです。

このように、日本人は、自分たちの中で地域性を作り、そして、その地域性の中において氏神様を中心にした社会を作り上げ、その社会の中において、氏神様を祀る地域の人々と、その地域に低号したさまざまな「知恵」や「習慣」「しきたり」を伝承することによって、その地域性を維持してきたのです。そして、その地域性こそが、「社会の目」と言う形

で「他人の視点をした社会性」を持ちながら、自らが社会の中で恥ずかしいと思うこと、または倫理にも執ると思われることを自粛してきたのです。そして、この感覚が、今回の東日本大震災の中においても生かされたのではないのでしょうか。

まさに、外国のマスメディアから東日本大震災の際に絶賛された日本人の「規律性」「秩序」は、このようにしてできてきたのではないかと考えられるのです。

以上